# リバース！～性別逆転～

紅茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リバース！～性別逆転～

【Ｎコード】
Ｎ８４５６Ｖ

【作者名】
紅茶

【あらすじ】
交通事故によって入れ替わり、性別逆転の生活を送ることになってしまった光と葉月。
二人の生活に安堵は訪れるのか！？

## 1話　オレは女になった（前書き）

小説初執筆なのでかなりヘタクソだと思います。
性転換＆ａｍｐ；入れ替わりの物語です。ＴＳ的表現がよく出てきますので、苦手な人はご注意下さい。それでも大丈夫という方はどうぞ！

よければ感想＆ａｍｐ；レビューもらえると嬉しいです。

# 1話　オレは女になった

夕日。
5月も中頃だというのに、こんなに寒く感じるのは、今オレが告白しようとしているからだろうか…。

オレの名前は、山瀬（やませ）　光（ひかる）。
髪は黒髪で、男にしては少し長い方だと思う。顔は中性的だと自覚している。身長は高一にしては少し高い方じゃないだろうか…。

そしてオレの目の前にいる人、つまりオレが今から告白しようとしている人は、相川（あいかわ）　雪菜（ゆきな）。
相川さんは、俗に言う黒髪ロングストレートで、性格は穏やかで優しい。何より美人だ。
そんな相川さんに、オレは入学してすぐ一目惚れしたのだ。

「相川さん！」
「なに？」
「こんなトコに呼び出してごめん。でもオレ、相川さんに伝えたいことがあって…。」
県立滝高校の校庭の一郭、少し薄暗い所でオレはそう告げた。

「…オレ、相川さんを一目見たときから好きでした。もし良かったら、付き合って下さい！」
言っちゃった…。もう後戻りはできない。

小さな沈黙の後、相川さんは申し訳なさそうにして言った。
「ごめんなさい。」

「…え？！……どうして。」
「こんなこと言ったら悪いかも知れないけど、山瀬くんって少し女々しいって言うか…何か男らしくない気がして…私男らしい人が好きだから…。」
もうそれ以上言わないでほしい。なんか泣きそうになってくる。…オレってホント男らしくないんだな…。
頭の中で次に言う言葉を探していると、相川さんは走って行ってしまった。情けない…。

そして一人になって気づく。
オレ、フられたんだ…。
１５年生きてきて初めて人に告白したけど、まさかフられるのがこんなにツラいものだったとは…。今頃になって告白したことを後悔する。もともとオレにとって相川さんは高嶺の花なのだ。

夕方の校庭に一人でいても何もすることがないので、オレはもう帰ることにした。校門を出て、家路を一人トボトボと歩く。もしさっき相川さんが告白をＯＫしてくれたら、今頃二人で会話でもしながら帰っていたのだろうか。そう思うと、すごく切なくなってくる。

明日から一体どんな顔をして相川さんに会えばいいんだろう…。もし告白したことがバレてクラスの笑い者になっていたらどうしよう…。相川さんが誰かに言いふらす？相川さんに限ってそんなことは…。でも告白の瞬間を誰も見ていなかったとは限らない。

そんなコトを考えながら横断歩道を渡っていると、あることに気づく。
信号が赤だ！オレはぼーっとしすぎて、信号が赤だということも知らずに渡っていたようだ。そして次の瞬間、オレの視界は一気に広くなる。

…浮いてる！？

オレは地面より少し高いところから、車道を見下ろしていた。オレとぶつかったであろうトラックや、その他数台の車が車線からだいぶはみ出しているのが見える。

…そうだ、オレははねられたのだ……。

気づくとそこはもう地面だった。

でも、轢かれた所よりだいぶ場所がズレてる。そんなに飛ばされたのだろうか。

ゆっくりと起き上がってみる。……痛っ…くない！！？なんで！？おもいっきり轢かれて、こんな所まで飛ばされたのに…出血や骨折どころか痛みさえ無いなんて…。まさかオレは死んだんじゃないだろうか…。享年１５歳なんてイヤだ！別段将来の夢とかがあるワケじゃないけど、もう少しぐらい生きていたいと思う。

でもそんな考えはすぐに打ち消された。

オレの周りに段々人だかりができてきて、オレを心配する声が聞こえる。霊になってたら見えないもんな。…わかんないけど。でもやっぱり無傷なのは理解できない。オレは怖くなって無我夢中で家まで走った。なんか体のバランスがとりにくいけど、今はそんなこと心配してる暇はない。

家に着いてチャイムを鳴らす。早く親の顔が見たい。親の顔が見たいといっても、別にオレがファザコンやマザコンという意味ではなく、早く落ち着きを取り戻したいからだ。

でもそんなオレの願いは、すぐに崩れ落ちることになる。

ドアを開けたのは母だった。その後ろには、怪訝そうな顔をした姉もいる。

オレの母は、山瀬（やませ）　明美（あけみ）。深い茶色の髪にゆるいウェーブをかけて肩より少し低いところで下ろしている。優しい性格と41歳と言うには若すぎる顔で、ファッションデザイナーなんかをやっている。ちょっと自慢できる母親だ。

姉の名前は、山瀬（やませ）　明（あかり）。母よりいくらか短い黒髪にこれまたウェーブをかけている。少しおかっぱっぽい。大学一年で頭も良いし美人だけど、いつもゴチャゴチャうるさくてちょっかいばかりかけてくる、とても自慢しようとは思えない姉だ。

母が不思議そうな顔をしていたので、オレは聞いてみた。

「どうしたの？」

「どうしたのって…。どちら様ですか？」

「は！？」

オレが驚いたのには二つ理由があった。

一つは母が毎日会って話しもしてるオレを見てどちら様なんて言ったこと。オレは今そんな冗談を言う気分にはなれない。第一オレの母はこんな冗談を言う人だっただろうか。

そしてもう一つはオレの声が女になっているということ。…なんで！？事故で声帯が壊れてしまったのだろうか。他はどうにもなってないのに？事故のショックで声が出なくなってしまったとかなら聞いたことあるけど、声が女になったなんて聞いたこともない…。

「お母さんどうしたの？オレだよ…？」

「オレって？」
「お母さんの息子…。」
母はだいぶ困った顔でオレを見ている。姉なんか猫の死骸でも見てしまったかのような目をしている。
母がドアを閉めそうになったのでオレは慌てて言った。
「山瀬　光だよ！！」
閉まっていくドアの動きが止まる。
「き、きょうの朝ごはんはパンと目玉焼きだし、昨日の夜ごはんはすき焼きだったよね…。家の家具の配置もぜんぶ言えるよ！…オレなんだから…。」
これでオレじゃなかったらただの変態ストーカーだ。
案の定、ドアが再び開かれる。一安心だ。

「本当に光なの？…」
「うん！オレだよ。…なんか声がヘンだけど…。」
「声だけじゃなくて、姿もヘンよ？…」
「え？……うわっ！！？」
見るとオレは女子の制服を着ていた。身体も女になっている。これはもう事故で声帯がどうこう言ってはいられなくなった。母と姉が困るのも無理はない。知らない女がいきなりあなたの息子とか言ってたんだから…。まあ姉の方は気持ち悪がってただけかも知れないけど…。

「…お母さん…。オレ本当に光なんだよ？…」
「…わかったわ…。」
そう言って母はオレを家に入れてくれた。つくづく思う。心が広い人だと。違う母親だったらこんな風に入れてくれただろうか…？
「お母さん…ありがとう！」
「いいのよ。だって光なんでしょ？何があったかはわからないけど、自分の息子を家に入れるのは当たり前じゃない。」

「…うん！」

なんか親子っていいなと少しあったかい気持ちいると、姉が母に言い出した。

「お母さんホントにいいの！？見た目で光じゃないってわかるじゃん！なんで入れたの？」

「う～ん。なんでかなぁ…。雰囲気？」

そんなもんで入れたのか！？オレの母は優しいけど、どこか抜けてる気がする。まあ今回は嬉しいけど、これじゃあ他人も入れてしまいそうで心配だ。

案の定姉がギャアギャア騒いでる…。

そんなコトをよそに、オレは一目散に洗面所に向かった。早く自分の姿を確かめたい！

どこも怪我はしていないか。

…女なのか。

洗面所の鏡に身体を映す。足の先までは入らないけど、上半身はきっちり入る。そこで見たオレの姿は……。

「…女……だ…。」

そこに映ったのは、えらく美人な女子高生だった。

## 2話　オレは認められる

「…これが…オレ？…」

その女子高生は、すらりと伸びた身体に豊満な胸、服の上からでもわかる美しい曲線美の肉付きをしている。髪はブロンドを少し暗くしたような明るい栗毛色の綺麗なふわふわの髪を、肩甲骨の下あたりまで伸ばしている。こういうのを『ゆるふわカール』なんて言うんだっけ…？そしてなんといってもこれ以上ないくらい美人だ。…いや、かわいいと言った方が正しいかな。身体とマッチしない少し幼い顔立ちがなんともエロティックな雰囲気を醸し出している。

「こんなことって…。」

なんて美声だ！

さっきは気が動転してて気づかなかったけど、めちゃくちゃかわいい声してる。まあ、今でも落ち着いたワケじゃないけど…。

オレはふと、着ている服に目をやった。…この制服、見たことある。…そうだ、この制服は確か、西綾女子高校の制服だ。西綾女子の制服は、全国どこにでもありそうな紺のセーラー服。リボンまで紺色なので、ただでさえ明るい髪が余計に目立ってしまっている。オレは胸ポケットに入っている生徒手帳を手に取った。胸に手が当たってドキドキする…。

「…桐山　葉月…？」

誰だろう。オレの新しい名前だろうか。

オレはそのことについてもう少し考えようと思ったが、台所から聞こえた母の言葉に、その考えは打ち消された。

「光ぅー！」
「はーい！」

オレは生徒手帳を胸ポケットに戻して、母のところに駆け寄った。
母はだいぶ優しい顔でオレを見てくれているが、姉はまだオレを睨んでいる。
「光、お風呂入る？」
「え！？…そりゃあ、入るけど……！！？」
そうだ、もうオレの身体はいつものオレの身体ではないのだ。今のオレの身体は、完璧な女体だ。

「…あ、ど、どうしようかなー…。」
「入りなさいよ。帰ってきたとき息切れしてたし、走って帰ってきたんでしょ？体ベタベタしない？」
それはその通りだ。オレもできることなら入りたい。…でもこの身体じゃ…。それに姉は…
「お母さん本気！？なんでこんな他人をお風呂に入れるのよ！なにしでかすかわかったもんじゃないわよ！？」
なにもしでかさないよ…。それにしてもここまで拒絶されるとちょっと堪える。

「なに言ってるの明。どこからどう見ても光じゃない…。」
「はぁ！？どこからどう見ても光じゃないじゃない！！」
なんかケンカになりそうだ。オレは母が怒ってるのをあまり見たことはないけど、それでも一応止めに入る。
「あ、あの…。オレ、入んないから…。じゃあ…。」
四つの眼球がこちらを向く。姉は言葉を発した。
「どこ行くのよ。」
「え、オレの部屋だけど…。」
「はぁ！？あんたの部屋なんかあるワケないでしょ！？」

そう言うと姉は、オレの細い手首を掴み、オレを家の外へ追い出した。

ガチャ

鍵まで閉めやがった。…ううっ寒い。気温じゃない、心が…。

オレはその後何分か家の前で突っ立っていた。なんでオレは自分の家に入ることすら許されないんだろう…。
すると突然ドアが開き、オレは少々ビビりながらドアの方を見た。
開けたのは母だった。
「光…ごめんね…明には少し叱っておいたから、入ってきて…。」
母が人を叱るなんて、オレは少し驚いた。
「…うん…。」
なんか姉に申し訳ない。姉は別に間違ったことを言っていたワケじゃないのに…。逆にあれぐらいで普通だと思う。でもずっと外にいるワケにもいかないので、オレはお言葉に甘えて入れてもらうことにした。…オレの家なんだけど…。

「光…お風呂入ったら？…」
「えっ…でも…。」
「明の言ってたコトなんて気にしなくていいのよ。見た目は光じゃなくても、言葉や動作を見れば光だってわかるわよ…。」
そんなトコまで見ててくれてたのか…。恥ずかしいけど、なんか嬉しい。…そういえば姉の姿が見当たらない…。ふてくされて自分の部屋に行ってしまったのだろうか。なんかかわいそうだ…。

「ホントにいいの？…」
「もちろんよ。なんでそんなこと聞くの？」
「ううん…。ありがとう…。」

オレは姉に悪いと思いながらも、洗面所へ行ってセーラー服を脱ぐことにした。
でも、ここで一つ問題が発生した。
セーラー服ってどうやって脱げばいいのかわからない…。ただ脱ぐだけだと思っていたけど、どうもそうじゃないみたいだ。それだといろいろ引っ掛かる。

試行錯誤の末、オレはサイドにあるファスナーを開くのと、襟と襟を繋ぐヒラヒラした布のボタンを外すという答えを導き出した。セーラー服を脱いで思う、女の子って大変なんだな…。男の学ランならこんなコトにはならない。セーラー服の下はTシャツだった。…そして…その下は…。

「ぶ、ブラジャー…。」
ドキドキが止まらない！…オレ、外していいんだろうか…？って！オレは一体服を脱ぐのに何分掛かってるんだ！いつもなら一瞬なのに…。決心したオレはそっと後ろのホックを外す。これもなかなか難しい…。

肩に掛かってたブラジャーのヒモがそっと両腕を滑り落ちる。それと同時に、二つの美しい丘が姿を表した。
「…綺麗…。」
オレは無意識の内にそう呟いていた。
形の整った豊満な乳房に、程よい大きさと形のピンク色の乳首…。これが本当にオレのものなのだろうか…？もしかすると夢なんじゃないだろうか…。それでも段々恥ずかしくなってくるので、これは夢ではないのだろう。
だとしたらなんでオレは女になってしまったのか…。考えてもなにもわからないので、オレは残りの衣服をすべて脱いで、さっさとお

風呂に入ることにした。
下を脱ぐのは上ほど恥ずかしくはなかった。だって上は『ある』けど下は『ない』んだから。

湯船に浸かっていると洗面所の方に人影が見えた。そうかと思うといきなり扉が開いて裸の母がにっこり笑いながら入ってきた。
「ふえっ！？」
びっくりしすぎてヘンな声が出てしまった。

「お、お母さん…。なにやってるの？…」
オレは浴槽の隅に縮こまる。
「なにって、光の髪、洗ってあげようと思って…。」
「そ、そんな…！？自分の髪くらい自分で洗えるよ…。」
「なに言ってるの。光、女の子の髪洗ったことあるの？」
「…ないけど…。男の髪とどう違うの？…」
「違うわよ…。女の子の髪はね、いつも綺麗じゃなきゃいけないの…。光はいつもゴシゴシ洗って終わりでしょ？…」
オレは言い返す言葉が見つからなかった。母に無理矢理イスに座らされ、髪を洗われてるオレ…。母の裸なんて見たのはいつ以来だろうか…。昔とぜんぜん変わってない。歳をとっているのか不思議なくらいだ。
オレは急に恥ずかしくなって下を向く。顔赤くなってないかな…？幸いお風呂だから大丈夫のようだ。勃つモノも今はない。

その後母は体も洗ってくれた。湯けむりと変なシチュエーションのせいでよく覚えてないけど、妙に心地よかったのは頭にある。

お風呂から出るとそこには姉のものと思しき下着とパジャマが用意されていた。母が言うには、これをオレが穿いていいとのことだが、ただでさえ家に入れるのも、ましてやお風呂に入れるのなんて大反

対していた姉なのに、自分の衣服を勝手に着られたら、オレは殺されるんじゃないだろうか…。

オレは結局、姉の服は着ずに台所に出た。台所といっても、リビングと同じ部屋にあるからリビングに出たと言った方が普通かもしれない。姉の服は着なかったが、さすがに女の子が素っ裸でいるのもはしたないので、体にバスタオルを巻いて行った。これも初めての経験だからヘンな感じだ。男は普通腰に巻くものだ。

案の定母は疑問を抱いたような顔をして…

「光？なんで服着てこなかったの。」

「…だって…。お姉ちゃん嫌がると思って…。」

オレは姉のことを『お姉ちゃん』と呼んでいる。高一の弟が呼ぶには子供っぽいかもしれないが、小さいときからこう呼んでいるので今さら変えられない。父と母も同様だ。無論、今のオレは弟ではなく妹なのかも知れないが…。

そういえば姉は？まだ部屋だろうか…。といっても、さっきまで部屋にいたという確証はないが…。

見ると姉はリビングでソファーに座ってテレビを見ていた。そして、オレと目を合わせないよう窓の方を見て恥ずかしそうにして言った。

「…別に…着てもいいわよ…。さっき光が言ってたこと思い出してみたら、家族しか知らないことばっかだったわ…。さっきは追い出したりしてごめん…。わたし、光を信じるから…。」

母は、『ねっ』とでも言うような感じでオレにウインクをしている。

オレは姉が信じてくれたことが嬉しくなって、姉に飛びつこうかと思ったがそれはやめておいた。

そんなコトをしたらせっかく得た信用もなくなってしまうかもしれないし、第一男のオレがそんなことをしたら、はっきりいって気持

ち悪い。
何度も言うが、今のオレは女なんだけど…。
「お姉ちゃん…。ありがとう！！」
「別にいいわよ…。」
オレがルンルン気分で洗面所に行って服を着てこようと思っていると、二階から足音が聞こえた。
降りてきたのは父だった。なんだ、もう帰ってたのか。
父の名前は、山瀬（やませ）　晴光（はるみつ）。
オレの光という名前は、父の名前から一文字、姉の明は母の明美という名前から一文字とったものらしい。髪は黒髪で、清潔そうなショートヘアだ。４３歳でサラリーマンをやっている。建設物の設計なんかをやっているらしいが、よくわからない。優しいけどしっかり者の良い父親だと思う。
「驚いたな…。ホントに女の子になってたなんて…。」
どうやらすでに話は聞いているようだ。
オレは少しホッとする。
父はオレの方に寄ってきて、頭の先から足の爪先までじっくり見ている。
「お…お父さん？は、恥ずかしいよ…。」
「あ、ああ…。ごめんごめん…。」
？オレは何を恥ずかしがっているのだろうか。
男が男に身体を見られて恥ずかしいだなんて…。オレってどうかしてる。
それでもオレは身体を包んでくれているバスタオルに感謝しながらそそくさと部屋を出た。

洗面所に行ってパンツを穿いてキャミソールを着る。なんでこんなにドキドキしてるんだろう…。
キャミソールはカップ付きのやつだ。なんでも寝るときに何も着けないと、バストの形が悪くなってしまうらしい。かといってブラジャーを着けると圧迫感と血行が悪くなるのが体にとってよくないとのこと。だから間をとってカップ付きキャミというワケだ。
『寝るときブラ』なんてのもあるらしい。色々あるんだな…。
よく見るとキャミソールだけ母のものだ。姉のでは入らないとふんだのか。今やオレの胸は、姉のものより遥かに大きい。
オレはパジャマを着て、髪を乾かした。

夕飯どき、話題はもちろんオレの身体のことだ。
母がオレに質問する。
「光、いつからその身体になったの？」
「…えっと…。オレ学校帰りに交通事故に遭って、多分それからなんだけど…。」
オレはたくあんを咀嚼しながら言う。
「交通事故に遭って女の子になったのか！まるで漫画の主人公だな！」
父はそう言って笑っているが、オレにとっちゃ笑い事じゃない。これからどう生きていけばいいのか。それに息子が事故に遭ったんだからもう少し心配してくれてもいいものだ。…まったく、母だけじゃなく父まで抜けてるところがある。あ、息子じゃなくて娘か…。うぅ…。

「交通事故って…。相手はどうしたの？」
姉は一応心配してくれているみたいだ。頭いいだけあって、こういうところはしっかりしてる。
「相手はわかんないけど、オレが信号見ずに渡ったのが原因だから

…。」
「それでも損害賠償とれるわよ？」
「損害賠償って…。オレどうもなってないよ？…」
「女になったじゃない。」
「あ…。でもそれって対象内なのかなぁ…。第一そんなの信じてもらえないと思うんだけど…。」

オレたちはその後も色々話したが、事態は何一つ進展しなかった。
まあ、目の前の女が自分たちの家族だとわかってもらえただけでも良しとする……か？

就寝前、オレは母の言葉で見ることができなかった生徒手帳の続きを見ていた。そこには、この女子高生の手がかりを知るには十分すぎるほどの情報が載っていた。
住所…。
なんでオレはもっと早く気づかなかったのだろうか。生徒手帳に住所が載っていることぐらい簡単に予想がつくはずなのに！

住所を見ると隣町のようだ。幸い明日は土曜日で学校は休みだし…行ってみるか…。オレの性転換の秘密を知る術はそれしかなさそうだ。
それにしても明日が平日じゃなくて本当に良かった。まあ、学校があっても休むしかないけど…。

考えてみると今日は、フられて女になって波瀾万丈の一日だった。
オレはどっと疲れが出てきて、明日への期待と不安を抱きながらも、今日はもう寝ることにした。
自分でも驚くほど早く意識がなくなった。

オレは明日、この性転換の本当の意味を知ることになるとは、今のオレには知る由もなかった……。

## 3話　オレはオレに会った

朝、起きたら元の身体に戻っていた。…なんてことを願ってはいたが、現実はどうもそうじゃないみたいだ。

女の身体になって二日目、朝を迎えるのは初となる。オレはまだ違和感の残る身体をゆっくりとベッドから起こしつつ、今日行うことの日程を考えていた。
日程といっても、やることはただ一つ。あの住所の場所へ行くことだ。もちろん不安はあるけど、なんかゲームのミッションみたいで少しテンションが上がってきた。

オレはさっさと顔を洗って歯を磨くと、家族揃って朝食を食べることにした。
オレが一生懸命シャケの身をほぐしていると、横から姉が顔をベタベタ触ってきた。

「それにしても、またやけにかわいい子になったのねぇ…。」
「や、やめてよ…。」
「こんなことしたら、どうなるのかなっ？」
「ひやっ！？」
姉はオレの胸を鷲掴みにした。
「へー。感度いいのねぇー。」
感度もなにも、オレは胸を揉まれたのなんて初めてなんだから、当たり前の反応ではないだろうか。大体男が胸を揉まれるなんて人生でそうそう経験することではない。太ってたら…わかんないけど…。
生憎オレは今も昔も太ってない。
姉は目の前の女がオレだとわかってからいたずらを仕掛けてくるよ

うになってしまった。なんというか……もうやだ…。

「こーら明。嫌がってるでしょ、やめなさい。」

「はーい。」

母の言葉に助けられて、オレはやっと食事を再開することができた。父は笑ってこっちを見ている。下心がないといいのだが…。ウチの父に限ってそんなことはないか。

「ところで光、今日どこか出かける予定ある？」

母が聞いてきた。

「う、うん…ちょっと。行ってみたいところがあって…。」

「まさか男をナンパでもするんじゃないでしょーね。」

また姉が乱入。

「し、しないよ！…もぉ…。」

なんで男のオレが男をナンパしなきゃいけないんだ…。オレは姿こそこんなだが女の子が好きなんだ！…オレは今の自分の姿で女の子とイチャイチャしているところを想像して、少し恥ずかしくなった。

「じゃあ服がいるわねぇ…。お母さんので似合うかしら…。」

「い、いいよ！昨日の制服で…。」

「そぉ？でも下着は洗濯しちゃったから、どっちみちなにか貸してあげるわね！」

「あ、う、うん…。」

なんか母はやけに嬉しそうだな。まさか母までオレが女になったことを楽しんでるんじゃないだろうか…？

「お母さんは女の子を欲しがってたからなぁ…。嬉しいんだろう。」

「え？女の子ならお姉ちゃんがいるじゃん。」

「違う違う。光みたいなお淑やかな女の子だよ。」

「そ、そんな…。オレお淑やかなんかじゃないよ…。」

「そうよね。『オレ』なんて言ってるもんね。女の子なら普通『わ

たし』よね。」
「やだよ…。男のオレがなんでそんなコト…。」
「…光、光はもう女の子なのよ。それに、家の外でもそうやって言うつもり？…」
母にまで言われるとちょっと考えてしまう。それにしても、オレはまた学校に通ったりできるのだろうか。

「わ…わたし…。」
「もうっ！なんでお母さんに言われたら言うのよ！…まったく…憎たらしい弟なんだから…！あ、もう妹か！ははは。」
姉はそう言ってヘラヘラ笑っていた。ムカつく！

食事が終わると、父と姉はそれぞれ通勤、通学に行った。二人とも土曜日なのに大変だな…。
残ったのはオレと母の二人。母は微笑みながらオレに手招きしている。オレは両親の部屋に入った。
「光、着替えるわよ。」
「う、うん。」
オレはパジャマとキャミソールを脱いでパンツ一丁になった。女の子にパンツ一丁という表現はなんか合わない気がする。
昨日一度見られているオレの身体だけど、今日は湯けむりも無いためか、恥ずかしさが拭えない。
「そんなに恥ずかしがらないの。今お母さんがブラ着けてあげるからね。」
「い、いいよ！自分でやるから…。」
そう言うとオレは母の手からブラジャーを奪い取った。
でもいざ着けるとなると全然上手くいかない。ただ胸をカップに収めるだけなのに！もう、なんで女の子の服はこう着にくいものばかりなんだろう。

「あらあら…光、全然着け方が違うわよ。……こうして、下を向いてかがんで……。」
結局オレは母に着けてもらうハメになってしまった。
自分でやるなんて言ったオレが恥ずかしい。…そうか、胸を重力で落としてからカップに入れるのか。なんか色々と合理的だ。

紺のハイソックスはさすがに母も持っていなかったので、代わりに黒のタイツを履くことにした。しかしこれもまためんどくさい。どうしてもお下品なガニ股になってしまう。こういうのも慣れていかないといけないのかなぁ…。早く戻れればいいんだけど…。母はオレが女の子になって嬉しそうだし…。一概に戻った方がいいとはいえないのだろうか…。戻りたいのは山々なんだけど…。

時刻は8時30分。
着替えも済ませたオレは、少し早いかもと思ったがもう行くことにした。少し歩くし、あまり遅いと家に誰もいないかもしれないと思ったからだ。

出発の前にトイレを済ませておこう。…トイレ!?トイレか…。また面倒なことになった。だがそうも言ってはいられない。
オレは便座に座った。チョロチョロと流れる尿。男と違って向きを調節できないが、別にその必要はなかった。
男のくせに小さい方をするにもいちいち座らなくてはならないオレ…。なんかものすごく惨めだ。
出し終わった後、つい拭くのを忘れそうになる。姉のパンツを汚してしまっては大変だ。
オレは少し暗い気持ちになりながらも、なんとか母を心配させない

ようにと、明るいあいさつで家を出た。
「いってきまーす！」
「いってらっしゃーい。」
静かに歩き出すオレ。
誰も男だと気づかないだろうか。気づくワケないか。

玄関から出てくるオレを、近所のおばあちゃんが『こんな子いたっけ？』という目で見てくる。
オレは軽くあいさつをしたが、おばあちゃんはしかめっ面でオレを睨んでいるだけだった。
気づいているワケじゃないと思うけど、おばあちゃんってこういうトコちょっと怖い。
オレは苦笑いするしかなかった。

オレはなんとか女の子らしく内股で歩くことを心がけた。途中何度も転びそうになった。

ほどなくしてオレは住所の場所に着いた。
そこは、オレの家とさほど変わらない、特になんのへんてつもない普通の一軒家だった。

恐る恐るドアを開ける…。
緊張の瞬間だ。だってなにが出てくるかわからないのだから。

ドアから出てきたのは、オレの想像を絶するものだった。まさに自分の目を疑ったという表現がふさわしい。
そこにいたのは…

「お、オレぇ〜〜〜！！！？？」

「アタシ～～～！！？」

相手もなにか叫んでる…。
そう、オレの目の前に現れたのは、間違いなくオレだ。……なんで！？オレはオレなのに…。目の前のヤツまでどうしてオレなんだ！？

ここでオレはふと思い出した。母に家の外では自分のことを『わたし』って言うように言われているんだった。でも今はそれどころではないのだ。早くこの頭の混乱をどうにかしたい。
オレがなにを言おうかパニックになっていると、目の前“オレ”は気でも狂ったかのように突然歓喜の表情になり、さけびながらオレに抱きついてきた。

「葉月…。葉月ィーーー！！！」
その瞬間、オレの体は憎悪で満たされた。
気持ち悪い！悲しいが。男に、というか自分に抱きつかれるのはこんなにも気持ち悪いものなのか…。
しかしそれと同時に、オレの頭にある一つの疑問がよぎった。

…葉月？どこかで聞いたことあるような…。
！！そうだ。昨日お風呂に入るとき、制服から取り出した生徒手帳に載ってた、つまり制服の持ち主の名前！…ということは…オレの名前？オレが葉月…桐山　葉月なのか！？
じゃあ、目の前のオレに抱きついている“オレ”は誰なんだ？
オレはそっと聞いてみた。

「…あなたは…誰ですか？…」
「ん？アタシ？……葉月！桐山　葉月だけど…。」
！！？どういうことだ！？桐山　葉月は二人いるのか？
「もしかしてアンタ…山瀬　光ぅ？」

「そ、そうですけど…なんで……！！！」
そのとき、オレの中でなにかが一つに繋がった。きっとこの人も、オレの制服から生徒手帳を取り出して見たのだろう。
オレは山瀬　光だが、外見は桐山　葉月。そして目の前の“オレ”は、桐山　葉月だが外見は山瀬　光。つまりオレ。
……そう、オレたちは多分…入れ替わったのだ……！

「ホントに入れ替わっちゃったんだね…。アタシら…。」
その後桐山さんはオレを家に上げてくれた。
話を聞くと、この人も昨日の事故でオレになり、親になかなか信じてもらえなかったらしい。今でも半信半疑の状態だとか…。お互い大変だ。

「そうみたいですね…。」
「ねーなんでそんな敬語なのー？入れ替わった仲じゃん。」
どんな仲なのだろうか。桐山さんはだいぶ気さくな気がする。というかなれなれしすぎる気さえする。オレには今日会ったばかりの人にタメ口きくなんてマネ到底できない。まあ、見た目はオレなんだけど…。
女の子の部屋に入ったのは初めてだけど、この部屋はそんなに女の子らしい感じじゃない気がする。こんなものなのだろうか。それとも、こんな性格の桐山さんの部屋だからだろうか…？
オレがキョロキョロ部屋を見回していると、なにか思い立ったように桐山さんが口を開いた。

「ねぇ！アタシもう男なんだから、男言葉で話すね！光も女なんだから女言葉で話してよ！！」
いきなり名前で呼ばれてオレは少しドキッとした。
「は、はぁ…。」
「よォ！俺は男だゼ！昨日からだゼ！入れ替わったゼ！」
アホみたいだ。
「あの、男はそんなにぜーぜー言わないですよ…。」
「そうなのかゼ？じゃあやめるゼ！」
なんかムカついてきた。
「あのっ！もっとちゃんとした話しません？これからのこととか…。」
「…そうだな…。悪い。でも男言葉はやめないから！光も女言葉つかえよ？じゃないと学校とかで困るだろ。」
学校…！？そうだ、オレたちには学校というものがあるんじゃないか！あさってからどうやって学校へ行けばいいのだろうか…。そういえば桐山さんはどこの学校へ通っているのだろう。

「あの、桐山さんの学校ってどこなんですか？」
「あ？俺？西綾女子だけど…。」
もう完全に男になりきってるようだ。
「てか生徒手帳見たんでしょ？だからココ来たんでしょ？なに言ってんの？」
「あ…そ、そうでした…。」
頭がパニクっててすっかり忘れていた。そういえばそうだったではないか。どうしちゃったんだろう…オレ。
「光っておバカさんなんだねー。かわいいよ！好きだなーそういうトコ。」
オレの顔が一気に赤くなる。…そんな！こんなかわいい子から『好

き』だなんて…！もっとも、そんな意味で言ってるワケではないし、見た目はオレなんだけど…。

「…あの、じゃああさってからはもちろん……。」
「そう！俺が光の学校に行って、光が俺の学校に通う！これしかないっしょ！！」
「そ、そうですよね……。」
「クラスとか細かいことは生徒手帳に載ってるからな！」
「…はい…。」
オレの学校はあさってから西綾女子か…。って、ん？西綾女子…？ていうことはつまり……女子校ぉぉぉ！！？

「あ、あの。西綾女子って、女子校ですよね！？…」
「だから“女子”ってついてんだろ？ホントにバカ？」
「うぅ…。」
桐山さんの言う通りだ。オレは本当にバカなのかも知れない。なんか…気づくのがいつも遅すぎる気がする。
オレは女の子だらけのところで上手くやっていけるのだろうか。そりゃあ確かに姿かたちは女の子だけど、言葉とか動作とか好きなものとか、女の子として知らないことが多すぎる。

「まあそんなに気に病むなよ…！なるようになるって！」
そう言って桐山さんはオレの肩をポンポンたたいてくれた。
見た目はオレなのに、やけにかっこよく見えるのはオレの気のせいだろうか…？

「どうしてこんなことになっちゃったんだろう……。」
オレが何気なく行った一言に、桐山さんの声のトーンが一気に低くなったのでオレは驚いた。
「光、お前自分が女になって不幸だと思ってんのか？…」

!?突然なにを言い出すんだ?そんなの決まっているではないか。
「そ、そりゃあ…。まあ…。」
「だったらその考えは今すぐ捨てろ。今のお前は少なくとも幸せだと思うぜ?」
オレが幸せだって?一体どう考えたらそんな結果に結びつくんだ。
桐山さんの方こそバカなんじゃないか?

「な、なんでそうなるんですか!?わたしは」
オレが続けようとしたら、桐山さんが割り込んできた。
「お前俺になってなかったら死んでたかも知れないんだぞ?」
「!!!??」
「あんなおっきい事故に捲き込まれて、死んでないなんておかしいと思わないのか?…それはひょっとしたら神様が死の代わりに、俺たちを入れ替えるという運命を選んでくれたのかも知れないんだぜ?…たとえ性別が逆転したとしても、死ぬよりは幸せなんじゃねーの?」

オレはその言葉に、だただただ驚くことしかできなかった。こんな考え方ができたなんて……。オレは神様とかはあまり信じないタチだけど、この考え方ならオレは十分幸せだ。オレの心は、一気に軽くなった。

そんなオレの気持ちを察してくれたのか、桐山さんは小さく微笑んでくれた。オレはやっぱり今日ここに来てよかった。

「桐山さん……ありがとう。」
「いいよ…。わかってくれれば。光は決して不幸じゃないってこと。」
「桐山さん…わたしね、事故の瞬間、まだ死にたくない、もう少し

生きていたいって思ったんだ。」
「ふふっ、俺も。」
「ほんと？…だから神様が二人の願いを叶えてくれたのかなぁ…。」

オレたちはその後もいろいろ話し合った。
気持ちはとても落ち着いていた。

## 4話　オレは服を買う

桐山さんの家を出るとオレは家に帰った。本当はこの姿を桐山さんの両親に見せて安心（逆に不安になるかも知れないけど…）させたかったけど、二人とも遅くなるそうなので写真だけ撮って帰ることにした。

玄関を開けると母が迎えてくれた。
「お帰り光。…あら、ずいぶんいいカオしてるじゃない。なにか解決できそうなコトあったの？」
「ううん。そうじゃないけど…。オレ、この身体でもいいかなって……。」
「そう…。光がそれでいいと思うならお母さんもいいと思うわ…。」
「うん…。ありがとう、お母さん。」

オレは今日も母に洗ってもらいお風呂に入った。
母も仕事で疲れてるのになんだか申し訳ない。早く自分で洗えるようにならないとな……。

夕飯を食べながらオレは今日あったことを家族に話した。
話し終えると、父がワクワクしたように口を開いた。

「交通事故で性転換じゃなくて、交通事故で入れ替わったのか！ますます漫画みたいな展開だな！」
また言ってる…。父は一人で笑った後、女三人の痛い視線に気づき、申し訳なさそうにうつむいた。

こっちは大変な目に遭っているというのに…。それでも昨日と比べるといくらか気は楽だけど…。

母がその場を仕切り直すようにして言った。

「ねぇ光。明日お母さんと一緒に女の子の服や下着買いに行きましょ！お母さんと明のじゃ合わないもんね。」

「えっ…。」

確かに二人の服では合わない。でも、男のオレが女物の服なんて…。

「お、お母さんに任せるから…買ってきて……。」

「そうは言っても…。サイズがわからないじゃない。」

そりゃそうだ。仕方ない…。恥ずかしいけど行くしかないようだ。

たとえ今行かなくても、男に戻る方法が見つからない以上いつかは行かなくてはいけなくなるし…。

「…わかった…。行く。」

「ふふっ、光はどんなの買ってくるのかなー？」

姉はあいかわらずイヤミなことを言ってくる。

オレは歯を磨いてから、今は自分の部屋にいる。

今日も少し早いけどもう寝ることにした。昨日も疲れたけど、今日は今日で事件の真相に触れて疲れたのだ。きっと明日も大変な一日になると思う。そう思うとまた少し不安になってきて眠れないかもと思ったけど、体の方はどうもそうじゃないみたいだ。

オレはすぐに深い眠りに落ちた。

日曜日、オレは母と近所のデパートに来ていた。
理由はもちろん、女物の服と下着を買うため。

「光、そんなに大股で歩いちゃダメよ…。」
「…あ、そっか…。」
オレはまだ全然女の子になりきれていない。もっとも、女の子の身体になってまだ3日目なのだから、無理もないか…。

「ここでいいかな…。」

母が立ち止まったところにあった店は、若い子向けの下着売り場だった。
オレはおろか、年齢的に母まで入るのが恥ずかしそうなところだ。
オレのためにこんなトコに連れてきてくれたのだろう。なんだか申し訳ない。

「まずはバストサイズを測らなくちゃね。」
そういうと母は近くの店員さんを呼び、オレを試着室へと誘導する。

さすがに制服のままじゃ測りにくいと思って、オレは上を脱いでブラジャーとキャミソールになった。
しばらくするとメジャーを持った店員さんがやってきて、オレの身体の後ろに手を回し、前にメジャーを持ってきてサイズを測る。店員さんの頭がオレの顔のすぐ下にあって少しドキドキする…。アンダーやらトップやら母となにか話してるけどオレにはよくわからない。
結果からいうと、オレはEカップだった。

「やっぱり大きいわね、光。これじゃお母さんのブラじゃちょっと

キツかったわよね。ごめんね。」
「そ、そんな…。謝ることじゃないよ…。お、お母さんは、な、なにカップなの？…」
「お母さんはDよ？いーなー光は大きくて。」
「べ、別にそんなつもりで聞いたんじゃないよ……。」
やっぱり女の人は胸が大きい方がいいのだろうか。…よかったね、桐山さん。

母は少し笑った後に言った。
「じゃあ光、好きなの選んでいいわよ。まだ最初だし、3セットくらいでいいんじゃない？」
「う、うん…。」

好きなのって言われも…。仕方なくオレは店内を歩いた。所狭しと並んだ下着がオレの視界を覆い尽くしている。明るすぎる照明と、それを反射するカラフルな下着が目に眩しい。なんで男のオレがこんなものを選んでるんだ…。
オレは急に恥ずかしくなって、近くにあった手頃なブラジャーを母のもとへ持っていく。

「こ、こんなの…どうかな？…」
オレが持って行ったのは、ピンクのフリフリのやけに女の子らしいブラジャーだった。
「あら、光はこんなかわいいのが好きなのね！でも、これじゃあ学校で体操服着たときとかに透けちゃうわよ…。」

オレはかわいいのが好きとか言われて恥ずかしかった。たまたま近くにあっただけなのに…。でも確かにこれでは体操服のときに透けてしまう。母はそこまで考えていてくれたのか。まあ、元高校生だから知ってるだけかも知れないけど…。

オレは結局、白のブラジャーとパンツのセットを3つ買ってもらった。形はそれぞれ多少違うけど、今どきこんな純白の下着しか持ってない女子高生なんているだろうか。もう少しちゃんと選べばよかったかな…？
あと、高校用の紺ハイソックスも買っておいた。

「まあ、最初はそんなもんでいいと思うわよ？もう少ししたら光も自分の好みがわかると思うし……さ、次はお洋服ね！」
なんか母は少しうかれてる気がする。そういえば父が母はオレみたいな女の子がほしかったとか言ってたっけ…？じゃあこれは親孝行と受け取っていいのだろうか。

次に向かったのは、これまた若い子向けの洋服売り場。カジュアルな感じのイマドキの服がたくさんある。

「光ぐらいの年の女の子にはこういうお店がいいわよね。お母さんも光に似合いそうなお洋服探そうかな。」
母も選ぶなんてなんだか恥ずかしい。それでもさっきの下着よりはオレも少し落ち着いて選ぶことができた。
ダイタンなものから清楚なものまでいろいろある。女の子は男よりも着る服によってその人のイメージが変わりやすい気がする。それほどいろんなタイプの服があるということなのだろうか。

オレは迷ったあげく、薄いピンクのシフォンワンピース（とかいうらしい）におなかのあたりに太いブラウンのベルトが付いた服を母のところに持って行った。
それを見た母が言う。
「やっぱり光はかわいいのが好きなのね！さっきから持ってくるの

はピンクばっかり！女の子らしいのね、光は…。」

そ、そんな…。オレが女の子らしいなんて…。

ついおとといまで男だったのに。それにこの服を持ってきたのも、おしゃれだけどおとなしい感じがいいと思ったから、それだけだ。

でも確かにオレは服を選ぶとき、オレが着る服としてじゃなく、女の子に着てもらいたいというか、理想の彼女像的な考えで選んでいたから、どうしても男が好むような『かわいい』感じのものを選んでしまうのかも知れない。

その後もオレと母はいろいろ服を選んでいった。さすがに母はファッションデザイナーだけあってセンスがいい。

買い物を終えたオレたち二人は出口に向けてフロアを歩いていた。

すると、前の方から見覚えのあるヤツがこちらに向かって歩いてくる。

…あれは……オレだ！！

そう、前方から歩いてきたのは紛れもなくオレ、つまり桐山さんだ。

それは母も見ていたようで、母は目を見開いたかと思うと、買ったものも置き去りにして桐山さんの元へと飛んでいってしまった。

「光ぅ〜〜〜！！」

母は桐山さんに抱き付いて頬をスリスリしている。

「ちょっ…あ、あの…。誰ですか？」

そりゃそうだ。知らない女の人にいきなり抱き付かれているんだもんな。それでも桐山さんは冷静でいる方だと思う。

仕方ない、説明するか……。

「じゃあ光が入れ替わったのが、この葉月ちゃんってコトなのね？」
「うん。」
「はあぁ～、愛しいわぁ。二人とも我が子みたいに思えてきたわ。」
「え！？えぇ…。」
なに言ってるんだ…。母はたまによくわからないことを言い出す。
桐山さんも呆れたのか、流れを変えるようにして言った。
「光は何しに来たんだ？」
「ああ、今日はお母さんと服を買いに来たの。入れ替わっちゃって着る服がないから…。」
「二人ともすごいわね！もうしゃべり方まで変えてるの！？」
「……。」
お母さん、ちょっと黙っててよ…。

「服だったら前俺が来てたやつがあるからウチに来ればよかったのに…。」
「あっ！そうか、そうだね…。」
考えてみれば確かにそれが金銭的にもよかったかも知れない。…でも、桐山さんの服か…なんかすごい派手なヤツだらけでオレの趣味じゃない服ばかりのような気もする…。
「なんだその目は。俺がヘンな服ばっか持ってると思ってんのか？いいよ別に、いとこにでもあげるから。」
「あ、いや、そんなこと…。」
桐山さんはエスパーか！？

「桐山さんは何しに来たの？」
「俺？俺も服買いに来た。」
「あっ、じゃあわたしの服いる？わたしもどうすればいいか困ってたんだ。」
「いらない。地味なのしかなさそうだし。」
「ひ、ひどい…。」
ごもっともなのだが…。オレは派手な服なんて注目を集めそうで恥ずかしくて着られない。前も、そして今も。

「じゃあ俺、まだ買い物があるから…。光！明日頑張れよ！」
「う、うん…。」
そうだ。オレは明日から西綾女子に通わなければならないのだ。それは桐山さんも同じなのに、人のことまで頭が回るなんてやっぱりすごいと思った。

太陽が姿を隠す頃、オレは一人でお風呂に入っていた。いつまでも母に洗ってもらってばかりでは申し訳ないので、この身体でもだんだんといろいろ一人でやれるようになっていかなければならない。オレは母が洗ってくれたのを思い出して、なんとか見よう見まねで髪と身体を洗っていった。

夕飯どき、母は今日デパートで桐山さんに会ったときのことを話していた。
「葉月ちゃんはしっかりしてていい子だったわよ！」

それを聞いた父が言う。
「へぇ～。見てみたいな。」
「見てみたいって…。姿は前までのオ、わたしだよ…。」
「ああそうか…。じゃあ入れ替わる前の姿が見てみたいな。」
「それは今のわたしだよ…。」
「あ、ああ…。そうか……。」
ふふっ、困ってる困ってる。まあ、無理もない。当事者のオレでもよくわからなくなるときがある。きっと学校に行ったらこんなことだらけだろう。もちろん、困るのはオレ一人でなければならない。他人に入れ替わったことがバレてしまったら、どうなるのかわかったものではない…。

オレはベッドに仰向けになった。
明日、見知らぬ学校へ行き、見知らぬ人たちと授業を受けなければならない。そう思うと、とても緊張してきた。
でもやっぱりそれは桐山さんも同じなのだ。
勇気を出さないとな…男だろ！……元。
そんなことを考えながら、オレはゆっくりと瞼を閉じた…。

## 5話　オレは女子校に行く

月曜日。
悪い意味で待ちに待った日が来てしまった。オレは今日、男にして男子禁制の女子校に登校しなければならないのだ。

オレはまだぎこちなさが残る手つきで支度を済ませると、急いで玄関へ向かった。学校の場所は大体わかるとはいえ、初登校なので少し早めに家を出ることにした。

そんなオレを母が見送りに来てくれた。
「光、いろいろ大変だと思うけど…頑張ってね。」
「うん、ありがとう。…行ってきます！」
いつも世話してくれる母を心配させたくなくて、オレは精一杯の笑顔でそう言った。でも、内心不安だらけだということはきっと読まれているだろう。オレの母親なのだから。

西綾女子高校までの道のりは途中バスに乗る必要があった。それほど遠くないとはいえ、とても歩いて行こうと思える距離ではないのだ。

いくつか町を過ぎたところでオレはバスを止めて運賃を払った。
これからは定期券を買わないと財布がとんでもないことになりそうだ。

バスからはオレ以外の紺服も降りてくる。西綾女子ももうそう遠くない。

何分か歩くとそこはもう学校だった。
どうやら西綾女子は私立校らしく、校舎は広くて新しくて綺麗で、オレの元いた公立の滝高とは雲泥の差だ。

オレは周りの生徒たちに続き、校舎の中へと入っていった。
一年生の教室は三階からで、一階や二階は職員室やらなんちゃら室やらいろいろな教室が続いている。教室までエレベーターで行くなんて公立では考えられないことだ。

生徒手帳を見るとオレは５組らしい。全部で１０クラスあるみたいだ。本当に日本が少子化なのか疑わしくなってくる。

オレは教室に入り足を止めた。

［引き続き執筆中です。］

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8456v/

リバース！〜性別逆転〜

2011年10月2日23時30分発行